■棺を形作る釘・鋏（かすがい）■

一須賀古墳群では、発掘調査の際に多数の釘や鋏が出土したことから、板材を釘と鋏で繋ぎあわせた釘付（くぎつけ）式木棺が使われていたようです。

日本国内では、河内と大和で、釘付式木棺が最も早く使われました。

河内における釘付式木棺の始まりは、古墳時代中期に築かれた藤の森古墳と高井田山古墳に遡ります。

横穴式（よこあなしき）石室の導入と深く関わるこの２つの古墳からは、大型の鉄釘と鋏が出土しています。

とくに、釘の頭が四角形の鉄釘は、一須賀古墳群で最も早い時期に築かれたＩ－１８号墳と高井田山古墳で出土しています。

この釘は、朝鮮半島の古代国家である百済（くだら／ひゃくさい）で見られる釘と、とてもよく似ています。

一方で、18 号墳以外のＩ支群やＢ支群など他の古墳では、釘の頭を折り曲げた釘や、頭を曲げずまっすぐな釘が主流です。

また、鋏が出土する古墳としない古墳が、支群単位で異なることもわかってきました。

一須賀古墳群という墓域を共有する集団の中でも、支群や古墳ごとに、釘や鋏の利用状況が異なっていたようすがうかがえます。